

いわきから自主避難 高校生の鳴下全生さん 被ばくの有感なしくして

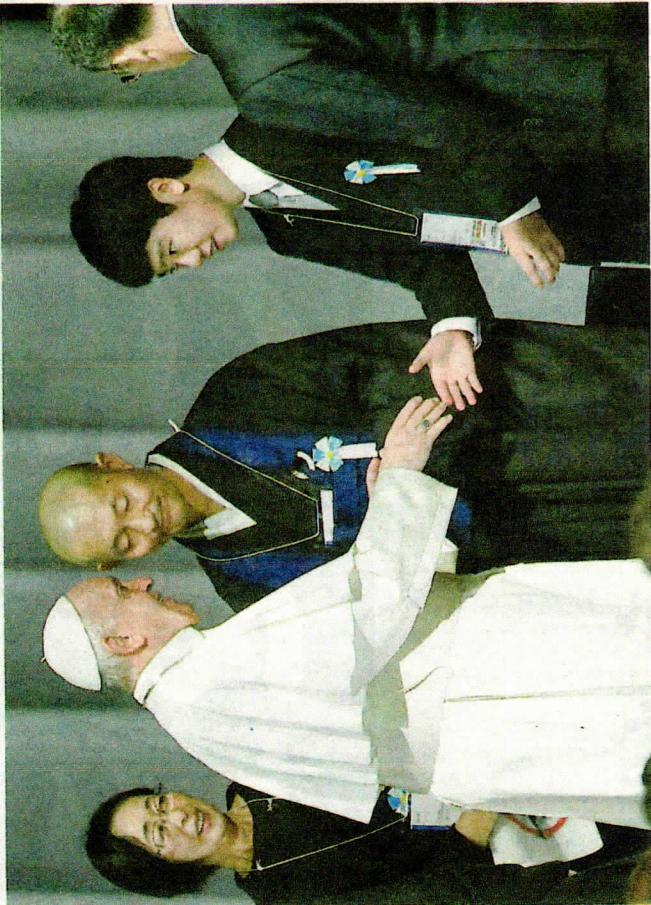
ローマ教皇(送玉)と再び会った少年の目は、力強さを増していく。たな。東京電力福島第一原発事故で本県から自主避難した高校二年鴨下全生(まつき)さんは、「やはいじめを受け、救いを求めて教皇に宛てた手紙」がきっかけで今年三月に謁見(えつけん)。東京で二十五日開かれた集会では「僕らの未来から被ばくの脅威をなくすため、世界中の人に届けた。」と語った。彼の言葉に、教皇は「あなたが何よりも大切な人間だ」と笑顔で答えた。この手紙は、福島第一原発事故で心が碎けそうになつた昨年、支援団体に勧められ、教皇に手紙を出した。返信で届いたのは謁見の招待状だった。

が動きだせるように、どうか共に析ってください」と呼び掛け、握手を交わし抱き合った。 小学二年の時に起きた原発事故で、いわき市の自宅は放射線量が急増。避難先の東京都内の中学校では、すぐにいじめが始まった。転校したが、いじめは続く。鉛筆で太ももを刺され、階段から暴き落とされたことも。「このまま死ねたら相手の立場を悪くできるかな」とも考えた。

出自を伏せて中学生に進むと、平和で幸せな生活が訪れた。しかし、親友にうら真実を明かせず、原発問題を討論する時も「一般的」な意見しか言えなかつ

東京都内で二十五日
に開かれたローマ教皇
(法王)と東日本大震
災被災者との集いに出
席した南相馬市小高区
の同慶寺の住職、田中
徳雲さん(写真)は集い終
了後、福島民報社の取
材に応じた。田中さんは「今回の集いを機に
生まれる新たな関係や
連帯に期待したい」と
語った。

南相馬の同慶寺住職 田中徳雲さん



東日本大震災被災者との集いでスピーチをした(右から)
帽下全生さん、田中徳雲さん、加藤敏子さんと握手する
口ーナ教皇フランシスコ三月二十五日午前、東京都千代田区

再会の場となつた二
十五日の集会。少し緊
張した面持ちで「懇親
なるパパさま」と切り
出し、避難生活で死
にいたいと思つほどつら
い日々が続いたことを改
めて証言。「原発は国
策。維持したい政府の
思惑に沿つて賠償額や
避難区域の線引きが決
められ、被書者の中に
分断が生じた。傷つい
た人同士が隣人を憎み
合うように仕向けられ
てしまつた」と述べ、
こうした被書を乗り越
えられるよう祈つてほ
しいと訴えた。

集会後、「思いは伝
わつたと思う」と報道
陣に答えた鶴下さん。
教皇からは「覚えてい
ますか」と尋ねられた
といい、「自分が方
聞くところなのに。感
動した」と興奮気味だ

新たな関係、連携に期待

南相馬の同慶寺住職 田中徳雲さん